

中東地域研究の手法

1. 研究組織

研究代表者：片倉もところ（中央大学総合政策学部・教授）

研究分担者：上岡 弘二（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）

鈴木 董（東京大学東洋文化研究所・教授）

大塚 和夫（東京都立大学人文学部・助教授）

小杉 泰（国際大学大学院国際関係学研究科・助教授）

清水 芳見（中央大学総合政策学部・専任講師）

2. 研究のねらい・目的

重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」の中の計画研究班「総合的地域研究の概念」（研究代表者：高谷好一京都大学東南アジア研究センター教授）の公募研究として行われる本研究には、主として以下の学術的目的がある。

1つは、中東地域を専門とする研究者の立場から、北アフリカから西アジアまでの広い地理的領域にまたがり、長大な歴史的伝統と独自の文明とを誇るこの地域を、総体的に研究していく手法を探ることである。本研究は中東の主要な3つの民族集団（アラブ、イラン、トルコ）を研究する研究者によって構成されているが、この目的を達成するためには、狭い調査地だけに関心を限定するとか、自分の研究分野に閉じこもるとかいった傾向を排除し、さまざまな研究分野に従事する研究者の協力に基づいた学際的な討論の場を設けなくてはならないとの認識を、研究参加者全員がもっている。

2つ目には、このように中東地域を基礎に練り上げた地域研究の手法を、東アジア、東南アジア、南アジア、アフリカなど、中東以外の地域研究の専門家たちの議論から生まれてきた手法と比較・検討し、その異同を確認することによって、よりグローバルな視点に立つ地域研究の理論・方法論の確立を目指すことである。その成果は、中東地域研究の領域にフィードバックされ、より広い視野に立った中東研究のあり方を提起することになると考えられる。

さらに、より実際的な問題として、4度にわたる中東戦争、石油ショック、イラン革命、湾岸戦争、パレスチナ・イスラエルをめぐる中東和平交渉などの国際的な事件が起きるたびに叫ばれ、またそれらの事象が過ぎ去るとただちに忘れられがちになる、わが国における中東地域に関するさまざまな情報の蓄積とその普及のあり方を探ることも、本研究参加者が共通にもつ関心事である。

3. 平成6年度の研究成果

本年度も、学際的な視点に立ち、「地域」の枠に不必要に拘束されないという平成5年度の方針を原則的に保ちながら、平成5年度の研究成果を整理し、発展させる方向で、研究を進めた。

研究会については、1994年7月21日に東京都多摩市にて本年度最初の研究会を行い、次いで、「総合的地域研究の概念」研究班との合同研究会を1995年3月4日から3月6日にかけて沖縄県那覇市にて開催した。研究代表者と研究分担者は、全員がいずれの研究会にも参加した。また、本研究者の参加者は、共同研究の成果に立脚しつつも、それぞれの関心に応じて、「総合的地域研究の手法確立」プロジェクトで開催された他の研究会にも参加し、中東に限定されない、より一般的な視野のもとで、地域研究に関する資料収集および考察を行った。

研究会以外では、地域研究に関する知識獲得のため、平成5年度に引き続き中東およびイスラーム地域研究関連の文献の収集を行ったほか、イスラーム圏の諸言語におけるイスラーム的概念（＝イスラーム的語彙）の伝播と変容を検証するための作業を実施した。

以上の研究活動のそれぞれについて、以下にそれらの概要を報告する。

(1)研究会

①東京都多摩市における研究会

この研究会では、まず平成5年度の研究成果について討論が行われた。議論の中心となったのは、昨年度の研究の過程で出された属地的地域と属人的地域をどのように考えるかという問題である。ことに中東の場合、地域の属地的な側面だけでなく、属人的な側面も無視できず、面でない世界、すなわち点と線によるネットワークの世界をどう位置づけるかが重要な課題であるとの認識で一致した。次に、この議論を踏まえ、本年度の研究会では、「ネットワークによる地域」の問題を中心課題とすることが確認された。

②沖縄県那覇市における研究会

この研究会では、まず「地域と生態環境」班の古川久雄京都大学東南アジア研究センター教授が、「中東と東南アジア—風土と変貌—」と題する基調報告を行った。古川は、発生の風土、変貌、規範、Niche、潜在的エクメネー、居住、生業、宗教、社会について、中東と東南アジアの比較を試みた。この報告をめぐって、とくに両地域の「社会的錬度」の問題を中心に討論がなされた。

次に、「総合的地域研究の概念」研究班の家島彦一東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授による、「都市とネットワーク」と題する発表があった。家島は、中東と東

南アジアの双方を視野に入れながら、「入れ物としての地域論」の観点から、イスラーム都市、とくに港市のネットワークについて論じた。その際、インド洋海域世界におけるハドラーミー・ネットワーク（ハドラーマウト出身者のネットワーク）を具体的な事例として取り上げた。この家島の発表に対して、コメンテーターの高橋美紀（東京大学大学院）は、中東、東南アジアとの比較の観点から、華僑・華人ネットワークについて論じ、もう一人のコメンテーターである「総合的地域研究の概念」研究班の応地利明京都大学東南アジア研究センター教授は、南アジア研究者の立場から、イスラームとインド洋海域世界の関係について意見を述べた。そのあと、海がつくるネットワークの関連づけの問題、中東、東南アジアにおけるイスラームの位置づけの違いなどをめぐって討論がなされた。

さらに、本研究班の大塚和夫が「イスラームと地域」と題する発表を行った。大塚の発表では、イスラームと地域をどのように考えるかに関して、「イスラーム化」、「アラブ化」の視点から議論が展開された。具体例として、エジプト化と北スーダンのいわゆる「民衆イスラーム」の事例が取り上げられた。コメンテーターである「植民地都市の社会史」班の加藤剛京都大学東南アジア研究センター教授は、大塚の発表に関して、中東との比較の観点から、東南アジアのイスラーム化について論じた。討論では、イスラームを抜きにして中東や東南アジアを考えることが可能かといった点を中心に意見が交換された。

最後に、本研究班の代表者である片倉もとこおよび「総合的地域研究の概念」研究班の代表者である高谷好一京都大学東南アジア研究センター教授による問題提起のあと、総合討論が行われた。片倉は、地域を考えるうえでの時間軸を現時点に絞るべきであるとの提起をし、面としての地域と点と線によるメタ地域という2つの地域概念について述べた。さらに、文化的存在としての人間が、文化をインプットされた、いわゆる「故郷」を1つの面的地域として考えるか、人間の移動によって文化がインプットされる複数の「愛着空間」を考えるかが、現在およびこれからの地域世界を考えるうえで問題になることを指摘した。高谷は、自己の「地域研究論」を展開したのち、本研究班に対して「中東は1つの単位か」との問いかけを行った。討論では、これらの問題をめぐって意見が交わされたほか、中東、東南アジアにおける生態の位置づけ、交易ネットワークから見た中東と東南アジアにおける生態の位置づけ、交易ネットワークから見た中東と東南アジアの関係等の問題に関して議論がなされた。

(2)イスラーム圏の諸言語に関する検証作業

本研究班では、総合的地域研究の手法確立へ向けた研究活動の一環として、イスラーム圏の諸言語におけるイスラーム的概念（イスラーム的語彙）の伝播と変容を比較の視点から検

証するための作業を行い、少なくともその第1段階を完了して、その方法とそこにふくまれている視点がさまざまな意味で有効性をもっていることを確認した。

まず、平成5年度の研究において、本研究班では、中東地域の特性を探るとともに、他の地域との比較を行った。そのなかで、生態環境を重視する観点から「世界単位」の適用可能性を探る試みも行われたが、世界単位の重要な要素として「世界観」に着目する場合、言語・文化圏が大きな重みをもつとの結論に至った。その結果、中東地域の1つの特徴づけとして、中東とは「イスラーム化＋一定度のアラブ化を特徴とする3言語・文化圏（アラビア語圏、トルコ語（チュルク諸語）圏、イラン語圏）」であるとの定式に至った。

平成6年度の検証作業は、平成5年度に確立された、以上のような認識を基本的な前提としている。3つの言語・文化圏は、少なくともより大きな「中東」という単位を形成する程度に共通性を有している。しかし、同時に、言語・文化的な差異があり、それゆえに中東内部の下位の地域を形成しているということになる（ただし、言語・文化圏を世界単位とみなすか否か、あるいは中東全体を複合的な世界単位とみなすべきかという点は、未確定であり、またそれゆえに本作業が行われている）。このような認識をもってからの基本的な課題は、これをいかなる方法によって検証していくかという点にあった。

そこで、本作業では、中東内部の下位の各地域（3言語・文化圏）の連続性と断続性（統一性と多様性）を具体的に検討するために、イスラームにおける基幹的な語彙が、いかに伝播し、変容しているかについて、実例をあげて比較することにした。当然のことながら、この方法は、中東以外のイスラーム諸地域を包摂すると、作業計画自体が拡大され、場合によっては作業がきわめて困難になる。もともとどれほど大きなチームをつくっても、このような作業は単年度で行いうるものではない。そこで、言語・文化圏を拡大する代わりに、平成6年度は、このような作業の有効性の有無について（ないしは有効性の程度について）、認識を深めることに主眼を置くこととした。

次の段階として、イスラーム諸地域のどの言語を対象とすべきかという点について議論が行われた。その結果、以下のような諸語が選択された。

アラビア語
ペルシア語
トルコ語
ウルドゥ語
中国語

マレー語

インドネシア語

ジャワ語

スワヒリ語

英語（英米のムスリム）

これは、基本的には効率性と網羅性という矛盾する要請を同時に満足させうる最大の範囲といえる。

作業の前提として、イスラームという共通性が「イスラーム地域」なるものを形成せしめているとは考えないことにした。検証作業の結果、かりにそうであると判断されたとしても、予見としてその方向を目指すわけではない。そもそも、「イスラーム圏」、「イスラーム世界」は、イスラームという共通性に着目して、本来複数の地域を概観する表現である。今回は、イスラーム圏について異なる地域の比較を行うのであって、共通性を析出することが直接の目的ではない。しかしながら、1つの仮説として、「イスラーム化」とは、「現地がイスラーム化される」と同時に、「イスラームが現地化される」過程と理解される。そうであるならば、イスラーム化の過程で、イスラーム的な語彙の吸収（＝当該語・文化のイスラーム化）と同時に、それらの語彙の意味や用法の変容（＝当該語彙の現地化）が起ると推定される。以上のような議論を踏まえながら、具体的な作業についての検討に入った。

この段階で、3つの大きな問題が生まれた。第1は、「イスラーム的な語彙」をどのように規定するかという問題である。たとえば、マレー語やインドネシア語を見ても、アラビア語からの借用語はイスラーム的であるとの理由によって流入しているとはかぎらない。語義的にも、同じことがいえる。そうなると、もっともよいのは、イスラーム地域の諸言語間の借用語をすべて、可能なかぎり包括的に比較することである。しかし、こうした考え方は、第2の問題、つまり量の問題を顕在化させる。つまり、どの程度の語彙を収集することが現実的かという問題である。だが、語彙を拡大するとともに、それに実際的な制限を加えた場合、選択の基準は何かという第3の問題が生じてくる。これら3つの問題には、当面のところ明確な答えがない。

最初の作業として、アラビア語に着目したが、これはアラビア語が語源である場合が多いという理由による。しかし、アラビア語の語彙自体時代の変遷があり、また、いつ伝播したか、伝播のあとの変容はどうなっているのかといった問題もあるため、恣意的な判断を排するための工夫が必要とされる。試行段階としては、クルアーンにおける用法（その語がクル

アーンのなかに出てくる場合)、中世の古典というだけでなく現代でも典拠とされているという意味で権威のあるアラビア語辞典、具体的にはイブン・マンズール(1233-1311)の『アラブ語辞典(Lisān al-ʿArab)』やフィールザーバーディー(1329-1415)の『大洋辞典(al-Qāmūs al-Muḥīṭ)』における定義・用法、さらに、中世については、イスラーム法の古典理論が確立したあとの13~15世紀に代表的な事例があればその事例、および現代における使われ方などがある程度補足できれば望ましいと判断された。

4. 研究の成果とフロンティア

平成6年度は、以上のように、本研究班では、研究会とイスラーム圏の諸言語に関する検証作業の2つを中心に研究が進められた。

研究会では、「ネットワークによる地域」の問題が本研究班の中心課題とされ、沖縄県那覇市における「総合的地域研究の概念」研究班との合同研究会でも、この課題が大きな論点となった。具体的には、中東と東南アジアは歴史的にも現在においても交易ネットワークにより結ばれているが、それぞれの地域を見た場合、中東では、イスラームがつくるネットワークがひじょうに重要であるのに対して、東南アジアでは、むしろ生態とそれに関連した海域ネットワークが重要であるとの指摘がなされた。ここで、中東、東南アジアという2つの地域を見るときに重視されるべきメルクマールの違いが、かなり浮き彫りにされたと考えられる。

イスラーム圏の諸言語に関する検証作業については、この作業から現時点で次のような事実が判明している。つまり、宗教に関するもっとも基本的な語彙に違いが見られるということである。たとえば、ペルシア語では、「礼拝」、「主」等を本来のペルシア語の語彙で表現するものの、「宗教」というような基本的な語彙はアラビア語化しているが、インドネシア語では、「宗教」、「礼拝」、「断食」といったイスラームの根幹に関わる語彙が、サンスクリット語(=イスラーム以前のヒンドゥー文化の言語)やマレー語から入った語彙でできており、アラビア語ないしはペルシア語から語彙が入っていない。マレー語やインドネシア語におけるアラビア語からの借用語の多さを考えると、奇妙な現象といえる。だが、こういった結果が出るところに、本作業が断絶と連続の両側面を照らし出すのに有効な方法たりうることが示唆されていると考えられる。

5. 今後の課題

本研究プロジェクトは平成6年度をもって終了となるが、研究会における討論で得られた成

果や、2年間にわたる収集により得られた中東およびイスラーム地域研究関連の資料を用いて、今後本研究参加者は各自研究成果を公表してゆくことになる。

また、イスラーム圏の諸言語に関する検証作業については、今後も継続され、最終的には本年度購入したパソコン・ソフトを用いてデータベース化をはかる予定である。「平成6年度の研究経過」に記したような方向での作業を、さらにより具体的に精密化してゆけば、きわめて有益な成果が期待されよう。

6. 研究業績（平成6年度発表分）

片倉もとこ

『講座イスラーム世界1 イスラーム教徒の社会と生活』（編著）栄光教育文化研究所，1994.

『移動文化考—イスラームの世界をたずねて—』日本経済新聞社，1995.

「『世界単位』—中東の場合—」矢野暢編『講座現代の地域研究2 世界単位論』弘文堂，pp. 231-260, 1994.

上岡弘二

“Some Aspects of Modern Iranian Popular Beliefs.” Official Cult and Popular Religion in the Ancient Near East, ed. by Eiko Matsushima, Heidelberg : Universitätsverlag C. Winter, pp. 135-171, 1993.

“The Networks of Weekly Markets and Bazarmajs in Gilan.” Journal of Asian and African Studies 48-49 : 295-316, 1995.

“Weekly Markets of Gilan - Their Distribution and Change.” Journal of Asian and African Studies 48-49 : 317-358, 1995.

鈴木 董

『中東人国記』（編者）総合法令，1994.

「パクス・イスラミカからバベルの塔へ」『国際問題』411 : 18-29, 1994.

「外世界から—イスラーム世界—」『文明の地域性』（重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズNo 3），pp. 42-46, 1994.

「伝統的オスマン社会における奴隷の諸相」『歴史学研究』増刊11 : 13-20, 1994.

「多民族国家の光と影」『アメリカ史研究』17 : 21-25, 1994.

「イスラームと国際関係」平野健一郎編『講座現代アジア4 地域システムと国際関係』東京大学出版会，pp. 327-358, 1994.

「組織と支配」後藤明編『講座イスラーム世界2 文明としてのイスラーム』栄光教育文化研究所，pp. 327-358, 1994.

「世界秩序・政治単位・支配組織」『東洋文化』75 : 167-216, 1995.

大塚和夫

「変動する中東 Part 2 社会・文化編—北スーダンの食文化—」『中東協力センターニュース』6月号 : 44-49, 1994.

「部族・民族と宗教」佐々木宏幹・村武精一編『宗教人類学』新曜社，pp. 139-150, 1994.

「太陽・月・クォーツとムスリム時間分節化」掛谷誠編『講座地球に生きる2 環境の社会化』雄山閣

出版, pp. 67-89, 1994.

「ナイル河畔のマフディストたち—スーダン—」片倉もとこ編『講座イスラーム世界1 イスラーム教徒の社会と生活』栄光教育文化研究所, pp. 17-53, 1994.

小杉 泰

『イスラームとは何か—その宗教・社会・文化—』講談社, 1994.

「現代におけるイスラーム復興の眺望」『国際問題』411: 2-17, 1994.

「現代パレスチナにおけるイスラーム運動」『現代の中東』17: 2-26, 1994.

「イスラームにおける啓典解釈学の分類区分—タフスィール研究序説」『東洋学報』76-1・2, 1994.

「イスラーム」立山良司編『中東』自由国民社, pp. 43-79, 1994.

「中東における政党と政治組織」『中東年鑑1993—94』中東調査会, pp. 17-21, 1994.

清水芳見

「ヨルダンの村再訪記」『法政人類学』54: 3-7, 1993.

「ムスリムの冠婚葬祭」『歴史読本ワールド 特集=イスラムの謎』5-3: 126-131, 1994.

「アラブ・ムスリムの家族と結婚—ヨルダン—」片倉もとこ編『講座イスラーム世界1 イスラーム教徒の社会と生活』栄光教育文化研究所, pp. 225-259, 1994.

「アラブ・ムスリム社会の墓制—ヨルダンの事例—」『沙漠研究』4-2: 69-90, 1995.

「世界の親族形態(中東)」『事典・家族』弘文堂, 1995. (発行予定)